

大坂行徳松内亭

梅ち家この志す事よ
新方風 今息

京川地本謙

花平の果る心は只るて海峯
まよ射

堺 長谷寺秀政

古酒 なしくんえんき
一歩 秀政

京住高政

翰翰や流由入梅下高政

江戸梅原卜入

室蘭や秋多記時酒めいふ 卜入

京住自悦

下戸を今往るは死かき 自悦

大坂女飛之

大坂 女亀之

尾 此
石井

しよま
あま
尾 山

京 住也也

石井 尾 山

肥前 石井如自

石井 尾 山
如自

京 中嶋経流

おまのせとねむるはあつたてのついでに勝

堺 細川成政

人小汗もさるはまの清も成政

京 伴藤信徳

行見せふとあつたてのついでに信徳

大坂 樋口如見

京西六条常乐寺

八月
子夜

いづれは
いづれは
いづれは

いづれは

素徳

持嘉 各田院別当

雨降れ
雨降れ
雨降れ

月山

京 古筆 不佞

雨中
雨中
雨中

大坂 牧野 一得

大坂 牧野一得

月之耳 此はあや 鬼
とんぼのあひ

義濃 畠田惟玄

うゑをやはらの糸緒乃 苜蓿 柳 風

大坂 梶山宗吾

あまのつらりして へまのあし 縁な
いふは 出

伏見 小菟遠江殿

冬子今門霞也ふのたま
了
室甫

二条前園白康道云

つと山
乃多梅 作りあやむと能の多梅 友

大坂 西山宗園

いとしく先月きふ
こよりの
一四

大坂 西山宗園

文庫

詩寶堂

形はく是母も終き御人母あやうけに
あはれゆるしとてやあやうけの終業
あまほしき日と物と是を信母終なき
事しをほめられぬあやうけに業甲の
てと終母や武事と得られしと終業
と終業とかなあまの終業

終業の字

元禄十三^辰陽月^日旬 佐倉笑種



揚半井云也

ふんきんこあぬぬりふん
ふん

八幡の宮

かけうらまへし
此處を川の底
照

東妙海寺成就院

祖師の月忌
二月の忌
品

東加島書局

比叡山無量光院

梅の香りとて花の枝葉を
香し

遠列森法長

奇人此の如き

床を

送書床の如く人此の如く
法長

法長

京任厚金体音

此は久乃水や金波乃の
体音

孫河久能体音

孫河久能徳寛

正統字也古入名も此のま 徳寛

京大智武門

いふよ此の記号もさ母の梅花式 武門

京柳系正房

名よあふや新入月此水ら海 正房

浮世をみるに長はるる部么我

大坂大平伯貞

ちよきんふ板か糸糸うわ伯貞

平野伯末在宗文

よの葉乃種や難波のす斗

梅乃糸

江戸岩田守武

若年し老るる思やかつ死

書外

東平尾幸弘

勢多氏

まこと

郭公

益子 五月雨弘業

肥後内子

新以今定也くす乃純女也牙

肥後宗雲寺山石

ら戸た〜ぬもひのふら〜らぬぬぬぬぬ

東八子代

らちよ

大坂 伴務村 以良

経冊や梅此松交の印や以良

坂東の川 宗永

非亭り此央り目上清くとも宗永

依見任中野 一直

おの乃せねあなま此忠也いり中野の一直

伴務村 以良

東江宗順

多のとも二日酔せし一和酒宗順

江戸多世遊山

む戌婦人て鑑翰うらめしき聲 遊山

大坂小西来山

名をも啼鐘をきくは 遊山

東京常倫

京 東 常 倫

うゑ人おめりあつて後入女入常倫

京 東 常 倫

千代に坂よ山本屋だれん君の春 常倫

京 西 言 水

元 日
形も心もあふ人あふれ 鏡 言 水

大坂橋井親中

餅子名を誰か母ふおぼして
親中

大坂橋井賀子

南都

子へ

大佛乃胸より出さる

三月廿月

賀子

伊丹藤治宗純

氣をくらむやいさく之部

宗純

伊丹藤治宗純

羽列 晚翠堂桂葉

いさよ心親之知人かき酒

桂葉

海前志賀後安

九日 以々平たつき忍て老智山乃松 後安

大坂 国女

きんさく
まろて
梅人々
おうみ

安か入力けり
るれ女

おは
あ

力延久を寺日脱夫

常安んふ家
かみりりり
ろくお空雅

伴海屋代弘茂

大
かきまお
ほふ敷屋
れり涼
弘茂

系加納道と

花
もりや
きんこ
いなれ
はら
孫書
道と

指所世回三吉

花よりやきんこいなわとはら祿書道

指法正回三言

思ふいぬれ能やのちふとみは

三十一口

京塔在宗室

香成ますし君子あはしし柳乃花葉

京の島村心展

月少ぬかこえ柳かたし里 正取

唐為水節梅吟子

歌都^う約^と美^み花^は山^し梅^め吟

大坂松江近音

山^{やま}名^な富^{とみ}土^{つち}根^ね河^か元^{もと}了^{りょう}了^{りょう}社^{しゃ} 山^{やま}名^な 社^{しゃ} 山^{やま}名^な 社^{しゃ} 山^{やま}名^な 社^{しゃ}

京清水氏言種

之^の門^{かど}加^か美^み水^{みづ}鷗^う神^{かみ}言^{こと}聽^{きこ}

此後言承全門

之門加... 小鷄也神... 言聽

肥後... 金門

子たか... 金門

系了... 金門

主... 久次

伊丹... 金門

の... 猪凡

萬國通和堂

み行か一物一あふふた乃奥宣慶

系文川三條

みみ柄をたふらふての香の宮る味

尾列橋本舟造子

考乃品り清きやぬふ

ららつて海(巻)

考乃品り清きや海
つらつら海

月の總元き放るく新法師 倫貞

河波乃松比多

本我今約甲子歳老一代乃筆也

東 本 田 書 院

かゝる其乃名やあまの山乃海書院

平
男
山
今
志
野
毛
花
也
草

京
大
佛
永
昌
朝
英
朗

卯
花
也
草
毛
花
也
草
如
也

大
坂
白
江
醉
草

臣
也
也
尾
毛
花
也
草
也
草

京
大
佛
永
昌
朝
英
朗

毛
花
也
草
毛
花
也
草
也
草

友持此
物此為集
才齋

京三井中庭

ちき
山
丸
園
鏡
毒
曙
積

取之才也
一七身又風
能能
由健

河波籍原信友

ち
ハ
極

日比頭

研
之
勢

研
之
勢

系之願元胎

あつあつ何なるか
あつあつ何なるか
あつあつ何なるか
あつあつ何なるか

大坂陽白流云

あつあつ何なるか
あつあつ何なるか
あつあつ何なるか
あつあつ何なるか

東鴨水六九

あつあつ何なるか
あつあつ何なるか
あつあつ何なるか
あつあつ何なるか

京河と保成

水照の首より世もやうく
生 保成

伊水間作徳

枯野ふまゝ追はは素う乳
治徳

京の留賀種

名とみはと首は月や冬男有種

東 中山菜作

斗乃矢はたひ中紙はく大なる落

大坂淀屋ヶ巻

志々々も 蝶々浮ら 松の地産

江戸芳賀二晶

玉あや

伽々あ

芳賀草庵

一晶

長崎内田糖氷

長崎内回撥水

宿酒と立月乃々好里去掃水
了と好乳

京井上友房

夏乃春也月此福すこと船の尾友房

京作木匠船系

七通と一鳴好里言津也道繫

五好也

伽とあも

好里言津也

一品

大坂為本盛庸

口をくは年ちを山乃河を武盛庸

伊豆代松意

木がらや侍とあはれ松意

伊豆代松意

木がらや侍とあはれ松意

大坂川橋正行

大坂川崎正信

雨戸とて月を日と見たり
信あり

京 鈴村信房

朝云此
目の中
巻次
一聲西松原一枯竹とて信房

大坂 鈴村信房

目とて月を日と見たり
信あり

京師冠弁令五

弓矢射者此ら神也
と云ふ

江戸西恩恭徳

狩りや養鷹う海山の也
恭徳

京内白西相

年を狩りて中たる也
花は鏡餅 正相

京師冠弁令五

京五古貞集

夕く方乃花 摘なしやゆきの浦 貞集

伊藤邦光書

夕く方乃花 摘なしやゆきの浦 貞集

京五古貞集

夕く方乃花 摘なしやゆきの浦 貞集
世捨人

東音筆志

月乃魚流之飛張宛作之也

平大野集和

深草比掬の口——加了記 秀吉

京作行直親

生り今躬初書大の灌徳 直親

平大野集和

江戸橋下其角

昔多岐の雪の糸

其角

日くく乱と

京和自牧足

雪の窓とく

月よま

牧足

杖と筆にて

大坂徳成寺智詮

足とくく人なりや

東家鳴高和友

名月 我意を言ふは時より有 和友

一三三

大伴小作宗連

兄に女を中か移つりてと云

大坂後部素子

枯葉より古今乃と 素子
翠簾の養

東園昌房

京園昌房

死乃先と程福り、
此の字の書房

後水野福屋

かゝ衣たはさちか
福屋

仙臺大徳之丸

松島探水可成
秋人の書房

大伴國友之流

野後山色花より
気も春此雨流

京中野氏流

春七り新也
鬼乃春分秋
氏流

京中物院知春

松のぬき
心海に春
合けな
春

大坂喜来友流

大坂喜来友雪

上
海
喜
燒
市
友
雪

平
吉
相
本
白

石
不
か
い
み
只
一
と
連
瓜
作
奉
白

東
伴
友
相
白

松
笠
法
河
丸
を
そ
う
ま
急
や
う
一
と
丸
作
白

系神孝貞

寝衣の産み分け高し松原

孝貞

大坂槐本佩行

母の世乃と母を相付
母の世乃と母を相付

堺仙門達明

行の世乃と母を相付
行の世乃と母を相付

京極井友吉

文所のりつるもふりつる友吉

後和菜門垂心坊

首子かけんはなぬい此詩をうへる如海

行舟上流青人

如月や法念の
あはれ
青人

大坂中系園水

京下村康吉

是冬心より秋末のじまのあそび
康吉

江戸の輪一珠

此方より小如月
あそび
了
了

大坂鳥路文十

向林也也也
成也也

博覧方寸

櫻木寺方寸

波乃花何を種ごう葉目 奇
石

東福井重隆

僧人今人多くありて
裕實

東妙心寺大剛和尙

丁より深るわつ水くき此
皆書哉玄死

遊行人

青
一枝
由
掃
也
也

大坂長井殿

為
津
磯
磯
磯
五七寸
後

越前長井位可也

夏乃
夜
長
心
普
田
之
印
心

大坂林定明

土、坂林定明

まろしほ雁は香子藤津の由乃のふりり 定明

伴勢忠田園友

たしーの
滞ぬ 田孔香子 園友

京野田本妻

超しせは秘の所や露は花の露 本妻

守田養文

如多如秋 清溪如月 如月如月 如月如月

大坂坂東寺辭

津國御前農

造尔天

牛農子与親波汗瀆流石車一杏辭

京若坊天遊

餓鬼也 娘瓜 娘瓜 冲烟 娘瓜 谷遊

京若坊天遊

京丹狩友静

ふとくはひはつる波也

友静
拔川

伊勢多信及加

ふとくはひはつる波也
初日か
五か

栞列様御信西吟

栞
あふる物
西吟

大坂中村元

眼打魚乃

此一也
可存 一礼

京小倉玄赫

部々有の六かうせも気味
除立務

大坂十方富天聖

宗系
百あしつ鳴るる
天聖

坂倉宗系

京浜新好春

狗

金之甲 取帳元也
好春
中後乃父人哉

大坂極並舎羅

沖清系

如月也

男ささいし
舎羅

いかり

京浜日常知

佐藤娘と山娘いん糸姉妹

日常知

大坂小師松緑

大坂小節松録

軍船門敷の

おんけい

小石家

松録

江戸高舟今志

男子遊程を遊女乃業志

立志

大坂先吉定旅

お初よりかく松さんすまじよ

おんけい

定旅

京高泊漱士

如
之
也
乃
神
乃
林
下
一
樹
乃
漱
士

大坂岩橋豊流

春
志
乃
神
乃
林
下
一
樹
乃
漱
士

江戸河原但秀

春
志
乃
神
乃
林
下
一
樹
乃
漱
士

京福井重昌

京福井重昌

巧手成情あやうあいの
たの

伯耆住荒尾直久

あつこ目やうていへん箱直久

大津住原不卜

所こ乃念ほまふは是れを

大坂長井伴自

本公可名成身よすつねや
伴自
秋のし

京祢好軒慈敬

元龍のかろし志月乃氣丸とい

慈敬

阿波細井為家

ふのしめし女世とけのまうすお守

京都江種菜

肉一羽をのりやたんに浦子鳥糞

大坂葺井智徳

虫初也就之天骨双食菜
智徳

江戸山本素堂

清毛院や羊飼いの草子種

素堂

京之沢と馬首

若くは孫に及ばぬ
細伝

京山本養

西東流ふしと
養

大坂安富屋幸方

名はむじ
保しあり

大坂作舎集種

大坂作舎笑種

おのてゝおのてゝおのてゝ
おのてゝおのてゝおのてゝ
おのてゝおのてゝおのてゝ
おのてゝおのてゝおのてゝ

作丹森本百九

おのてゝおのてゝおのてゝ
おのてゝおのてゝおのてゝ
おのてゝおのてゝおのてゝ
おのてゝおのてゝおのてゝ

東本村物々

おのてゝおのてゝおのてゝ
おのてゝおのてゝおのてゝ
おのてゝおのてゝおのてゝ
おのてゝおのてゝおのてゝ

京奉長初書

色よりと書してあつた日雪に梅書

紀州日方貞長

之様書やあつた小枝の花を貞長

京吟苑書之映心

虫知るる所也若くは二人は建つて

江戸豊作東之

信豊信勝

心子海翁海々舟也信豊信勝

東喜舟志院

五々々々々々々々

信勝

信勝

信勝

尾州と未塔碑

元二の平の書もた部之皆成

伊豆村不ト

杉と女も雨の事佛不ト

京路方山

悪く片極海より片物の事也

京路月平春

京正月千春

あまのまじりてはるけき
あまのまじりてはるけき
あまのまじりてはるけき
あまのまじりてはるけき

江戸小坂井若菜

月のこした人よるる
月のこした人よるる
月のこした人よるる
月のこした人よるる
留梅 若菜

姫路住幸田正舎

雪あふらふらふ
雪あふらふらふ
雪あふらふらふ
雪あふらふらふ
物 處

系之園元怒

長江のほとけのすゝめ

江戸野上屋

徳政のすゝめ

系之列神戸可入

梅女はすゝめ

系之井石八

京山并石八

秋の夜は月影もかろく竹をこし
不夜

尾列の山並み

風もたはらけ
もたはらけ
もたはらけ
もたはらけ
もたはらけ

山並み

山並み
山並み
山並み
山並み
山並み

京師江林詩

去西
九門
あま
松
松
松

龍王寺志川

夕
秋
の
ほ
ろ
葉
や
あ
ら
ま
川

京師田舎徳

河
也
一
風
高
床
入
夕
那
市
徳

京師田舎宣安

平出本松白

古くは白目地子に白糸を織り交ぜたる也
本白

糸結明則為美延

凡ふや糸結明則為美延
糸結明則為美延

秀延

平進若世仙子

平進若世仙子
糸結明則為美延
秀延

八坂後志光貞

八坂後書院書具

親ねとねおのしと出と火燧式書具

哲州金龍寺楊叟

仰めやあまもりえもとねねの心入柳叟

京中尾我馬

ほこねく 出とて 書具

出羽野代佐里書

と
加

春

春

里書

秋

秋

出雲自墨之殿

春
一
夏
秋
風

京古嵐良和

京古嵐良和
梅
風

東形波紅雲

蝶の如く松令針を糸るん

世の世

江戸福田家

心つらむは世よ等閑乃友るん

鳥言

大坂長門志

能くも請ふをくは神の月も人む家

尾列右後堂横和

尾列 右 彦堂 横水

癖ごとく常ふは秋の扇か 横水

京中 野仲 昔

毛濡らふ沙の粒より秋乃毒 仲昔

京 親吉の 智泉

阿波の海 惟子もあは 平野式 智泉

伊丹上佛兒

秋の月夜に
佛兒

江戸蝶々子書

さくら花あはれ
人

江戸松尾芭蕉

いふもや秋の
人

東物舎蔵入

東約舎後入

カクハニキチノクニナリトモ守風道順

天王寺秘野坊

生魂

奉納

花乃新社壇且上家月夜

齋結

京要法寺目祥上人

蓬萊也清代之花玉亭

内后上御守殿

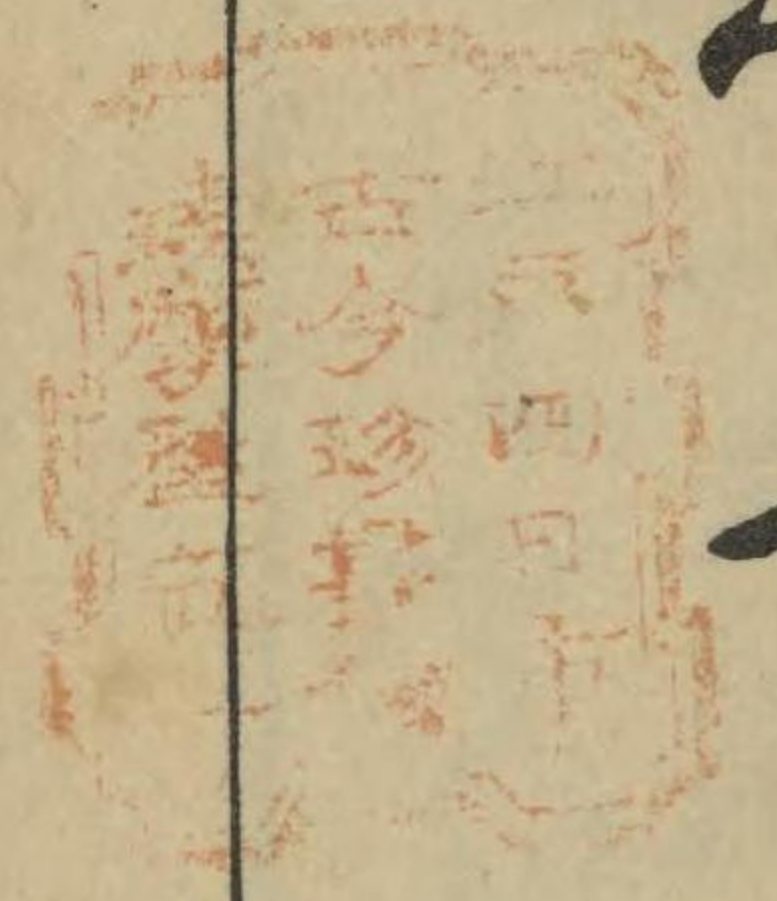
予観河成古舞丸の乃色し
る如は

西洞虎殿時成

昔あるも冠多し
花の下牧

細川殿書目江

うほくうかき
のりうと
新ひ乃
恋言



誹諧師手鑑列傳

内蔵下御守殿

予観河成古舞人の乃色し
る歌は

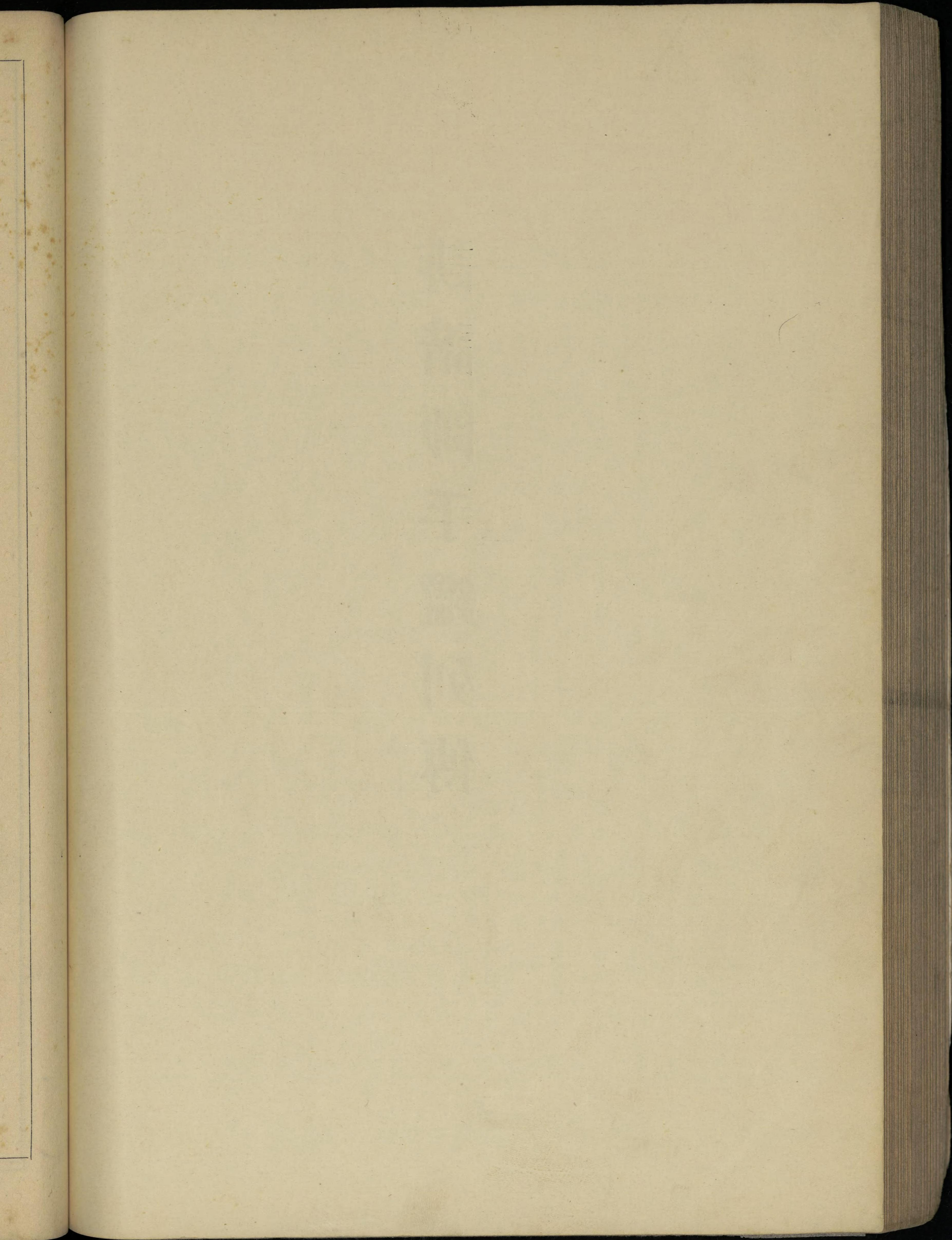
西洞虎殿時成之

若ぬあつた冠多し
あつた花の下
枝

細川殿書信

うほくうらわかに
ひらりとと移り
乃恋言

誹諧師手鑑列傳



諫鼓苔むして驚ぬ鳥の跡絶さる俳諧に目をふれこ

ろを悦しむる輩古今多しといへとも筆蹟いつれ

と知かたしこゝに古筆治平自眼をもつて其徳其名

世にみてる作者集をかれしを望寫是を種として其

外國々所々に所持いたされしを尋もとめ凡貳百四

十六枚なき跡のかたみにもやと梓にちりはめ侍る

又若竹のふし〜世にうたふ人濱の眞砂の數〜

なればしるしかたしなを抜出たるたかむなは後人

の選をまてるものならし

大坂松壽軒

延寶四^{丙辰}陽月廿五日

井原西鶴

永鶴

伊勢 荒木田守武

千句一飛梅やかろ〜しくも神の春

いせ山田 守武

伊勢内宮の神主。正四位上荒木田氏園田長官と號す。宗祇宗長周桂等に連歌を學ぶ。大永五年十月庚申の夜一首毎に『世の中』の三字を取入れし教訓歌百首を詠す。世に『世の中百首』或は『伊勢論語』と稱す。天文九年の冬創めて俳諧連歌の獨吟千句をものし後世俳諧の祖と仰がる。此「飛梅や」の句は其獨吟千句第一の立句なり。天文十八年八月八日歿享年七十七。辭世「あさがほにけふは見ゆらん我世かな」

山崎 一夜庵宗鑑

滿まるに出てもななき春日哉

宗鑑

支那氏名は範重、俗稱は彌三郎。近江の人。幼時好學の若き將軍足利義尙(九代)の侍童たりしが、延徳元年廿五歳の時義尙が陣中に急歿するや無常を感じて落飾し名を宗鑑と改め、攝州尼ヶ崎に居を定めて一休和尚に參禪す。明應年間攝津山崎巷關戸の院の傍に閑居して専ら俳諧を修す。故に世に山崎の宗鑑を以て稱す。後讃岐七寶山興昌院境内なる一夜庵に起臥する事二十六年、天文二十二年十月二日此の地に歿す享年八十九。京都天瑞寺に墓あり。著書としては、俳書の嚆矢と稱せらるゝ『新撰犬筑波集』(永正十一年編)あり。

辭世「古今夷曲集」卷第九に「背に癩瘡出來て身まかる時よめる宗鑑はどちへと人のとふならばちとようありてあのよへといへ」

烏丸 大納言光廣公

寛十二試鬼 元日丑也 空に今朝ねりいつる牛のはるひ哉

黄

烏丸氏。正二位權大納言。歌學を細川幽齋に學んで奥祕を極む。

寛永十五年七月十五日歿、年六十。

京 逍遊軒松永貞徳

あめてたやふれは草木もよひの年 長頭丸

松永氏、幼名勝熊、松永彈正永種の子。壯歲薙髮して松友と號し軒を逍遊と名づく。此の外柿園、芦丸屋、明心居士等の號あり。又晩年髻を束ねて童服を着し、自ら呼んで長頭丸又は延陀丸と云ふ。歌道を玄旨法印(細川藤孝)に、連歌を里村紹巴に學んで貞門俳諧の祖となれり。守武宗鑑の後を受けて絶えんとしたる俳道に灯を点じ、連歌の式目を基として俳諧の法式を定めたる「御傘」を撰したる事は彼の一大事業なり。初め京三條大路に住し、後五條松原の北東洞院の東に移り住す。勅賜に依つて花咲舎と號す。承應二年十一月十五日歿、行年八十三歳。洛南上鳥羽實相寺に葬る。

著書 誹諧御傘、淀川、油かす、百韻自註、五條百句、天水抄、紅梅千句等。
辭世 「露の命きゆる衣の玉櫛笥ふたゝびうけぬ御法なるらむ」

越前 本勝寺日能

春たつといふはかりにやかさり繩 日能

越前の人、敦賀本勝寺十三世住職。夙に貞徳の教を受けて秀吟多し。寛永六年十一月京都妙滿寺に於て山本西武が百韻俳諧を興行したる際も連座せり。承應元年寂。

京 誓願寺安樂庵

山風の吹口とちよかはさくら 策傳

策傳本姓平林、通稱は平太夫。京都誓願寺中竹林院の住僧にして醒翁と號す。金森宗和に茶道を學び、世に稱する安樂庵の習は此人より出づ。頗る頓智に富み滑稽諧謔をよくし、常に諸侯の會席に招かれて座興を助け、殊に豐太閤の寵を受く。晩年耳を聾し筆を以て口舌に代ゆ。會呂利新左衛門と同席の折は、新左衛門の狂歌に對して策傳これに笑話を附して興じたる事「瀨貞筆記」に見ゆ。元和の頃、板倉重宗の請により笑話を集めて「醒睡笑」八卷を著す。後世此の人を以て落語家の祖となす。寛永十九年正月八日歿、年八十九。

大坂 津田 休甫

花の雲富婁那もえやは夕嵐 休甫

本姓宇喜田氏、江齋と號す。大坂生玉に住す。貞徳門にして、俳腸自ら一風あり、性不羈磊落の一奇人にして、元祿の惟然坊に彷彿たるものあり。明曆の頃、六十三にして歿す。

辭世 「我命とは七九の鐘撞木杖金はもたでも南無阿彌陀佛」

京 野々口松翁

鹿ををふ獵師となるやさくら狩 立圃

野々口氏は親重通稱籬屋庄右衛門(又は市兵衛)立圃(一世)と號す。

別に松翁、拓翁の號あり。丹波の人、京都に住す。弱冠より智力衆に秀で、紫女の源語を好んで讀む。一年松江重頼と論争の事ありて師貞徳の許を退き、後烏丸光廣の學窓に參じて一流の祖となる。畫を能くす。

寛文九年九月晦日歿、年七十一。京寺町要法寺に葬る。

著書 花火草、徳萬歳、若きつね、片輪車、花月千句、歸花千句、阿太花千句、

筑子千句、碁打花見、河ふね、江戸むらさき、硯はいかい、老鳥千句、空つぶて、追善九百韻、都萬句、すりひうち、人眞似、九曲折花鳥千句、休息哥仙、鷓鴣千句、袖中記、美濃郡三十六禽句合、明鑑、源氏繪鈔等。

辭世 月はなの三句目を今しる世かな

同 松江維舟

下戸衆や胡椒丸呑花見酒 重頼

維舟、松江氏は重頼、通稱は大文字屋治右衛門、貞徳門、京都の人、旅宿を業とす。腐俳子乳父子、自江翁等の號あり。法橋に叙せらる。性剛直にして誤を見て止まる事を得ず、これに因りて友人と交りを斷つこと多し。野々口立圃との論争により貞徳の許を退き、里村懷惠菴の門に入りて連歌を學び、一流を立つ。延寶八年六月廿九日歿、年七十四歳。京都東山大谷に葬る。

著書 犬子集、毛吹草、梅千世、菊千代、懷子、時世粧名取川、佐夜中山、大井

川、溜池河御座、武さしの、浮世なぎなた等。

辭世 林禽もや菩提樹のたつまくむ清みづ

江戸 齋藤徳元

おちやかしら夏の初花遅櫻 徳元

齋藤氏、名は利起、通稱齋宮。貞徳門(或は友人とも云)濃州岐阜の人、織田信秀に仕へ、後雜髮して徳元と號す。又帆亭の號あり。江戸馬喰町二丁目(或は江戸町とも云)に住し、寛永十八年「俳諧初學抄」を刊行す。これ江戸に於て俳書を板刻したる初めなり。

高名年表大成には正保四年八月廿八日丹後に歿し、享年八十九、天橋立智恩寺に葬ると云ひ、俳諧兩面鏡には正保元年に歿すとあり。法名齋入。

辭世 今まではいきたは事を月夜かな

大坂 天満花鳥坊

われか身や心の月の影法師 空存

大坂天満川崎街川崎坊の住僧。松江重頼門。(或は友人なりとも云)寛文年間歿。「後撰夷曲集」卷第九に「空存追善」として「名斗をこゝにのこして本國にかへるや地水火風空存 重信」とあり。行年詳ならず。

著書 夢見草

京 雞冠井令徳

尺迦の鑓さひたかけふの御身拭

令徳

雞冠井氏(或云伊藤氏)通稱九郎右衛門。初め良徳と云ひ後令徳に改む。陀隣庵、梨柿園の號あり。京都の人。貞徳に愛せらる。延寶二年

三月三日歿、行年六十八歳或は延寶七年九十一歳とも云ふ。

著書 崑山集、土塵集、舉直集、親炙、四十餘年等。

京 安原正章

名のれ名のしきつも近し郭公

正章

安原氏、俗稱鑑屋彦左衛門、一囊子、一囊軒と號す。貞徳門にして承應元年點業を許され、薙髮して貞室と號し、二世花の本を繼ぐ。これはこれとはばかり花の吉野山の吟を以て名高し。貞徳の歿後、遺書、玉海集、七卷を補選す。晩年病みて歿せんとするとき、己が書きすてし草稿を集めて火中すと傳ふ。延寶元年二月七日歿(誹家大系圖の説六十四歳、山城鳥羽實相寺に葬る。

著書 玉海集、同追加、正章千句、非無漏毛理、五條百句、片こと、附合大全。辭世 今までは目見えせねども主人公はつくといひし年も明けり

江戸 高崎(島)玄札

元三の月や天下の弓はしめ

玄札

勢州山田の人、江戸本町四丁目に住し醫を業とす。江戸五哲の一人。

元祿二年十二月十四日歿、年八十三。(歿年ニ異説アリ)
著書 十種千句

京 山本西武

花衣ぬふやおくひもむはさくら

西武

山本氏、名は西武(にしたけ)通稱綿屋九郎左衛門、落飾して西武を「さいむ」と訓みて法名とす。無外齋、風外軒と號す。京都の人、貞門七誹仙の一人。蚤歳より師家の執筆に給したるを以て、秘訣、故實に通ぜり。延寶六年二月十八日歿、年七十三。

著書 鷹筑波集、砂金袋、同後集、久留流、萩花、何迄草、津似居兒等。辭世 夜の明て花にひらくや浄土門

伊豆 山田 女

天の戸のすかし方のかよ三日の月

光さたつま

美津女、伊勢山田の人、杉木吉太夫、光貞の妻。杉田望一門。諸家の集中に光貞妻と記せるは此の人也。正保四年七月二日歿、年六十五。

京 壬生昌意

秋の蟬は霜月比の時雨かな

昌意

京北岩倉の桑門、後壬生村に居を移して唯梅と改む。松江重頼の門、歿年不詳。